

うちに縁側にせまって来る。「大変だ早く子供達を」をあせる。仲々鍵が開かない「貴重品、それからそれから」頭が混乱し、手近の着替えを包む。膝上までの水の中を子供達と裏山に登る。近所の人々も続々登って来る。皆唇が白く声がふるえている。「実家の父は、弟妹は」いても立ってもいられない、「あつ来た」皆丹前姿だ。波に追われるように山にはい上る。眼下は今ほもう道も畑も呑み込まれ、小学校も二階しか見えない。おおきなラワン材がすごい速さで流れて来る。「ドーンドンバリバリッ」次々に家が浮き上る。「あーっ家が流されるー」皆大声で泣き叫ぶ、今はもう悪魔と化した巨大な濁流は、つい数十分前まで平和で美しかった村のほとんどを家諸共何十年間貯えた家財も思い出も一瞬にして黒い海の底に呑み込み引きさらい一面の廃墟と化してしまった。信じられない光景に今は皆茫然と立ちすくみ、やがて静かに絶望の涙を流した。異常に寒い。茫然自失の私達被災者に立ち上がる力を最初に与えて下さったのは、高台で被害にあわない親戚及び近所の方々の温かい援助と励ましであった。皆二世帯も被害者を受け入れて下さりどんなに嬉しく心強かった事が、今改めて感謝の気持ちで一杯である。又親戚や知人友人の方々の真心のこもった見舞いの数々、励ましは一生忘れてはならない事である。

河南中の皆さんの奉仕活動も本当に有難かった。全国各地、赤十字等からの衣類・毛布・鍋・食品等の見舞品はどんなに助かった事か頭の下がる思いであった。宮古の小百合幼稚園で頂いたブルーのガウンと同じ色の目をした神父さんの笑顔も忘れられない。この時私は助け合いの有難さと大切さを痛切に感じた。

自分達の事で精一杯だった私達被災者のため尽力して下さいた行政、消防団、各要職の方々陰の力があって今の高浜の発展があると感謝している。

⑭

津波

岩間芳子

小さい頃から私は父の語る津浪の怖さを聞いて育ってきました。何回も何回も、ことあるごとに聞かされました。

明治二十九年の三陸大津浪は、父が一歳二ヶ月の時です。その日は端午の節句で、母親と実家である重茂に里帰りした時被災したのです。倒れた残骸の中から、なにか泣き声が聞こえるということで、取り除いてみたら、こと切れた母親の背中の子供だけは命があったという訳なのです。それが私の父だったのです。何日も何日も泥を吐いたそうだと聞かされました。母親の面影も知らず育った父は、寂しい幼年時代を過ごしたんだろうなあと思います。それ故に父は私達子供にも、しっかりと津浪の怖さというものを、心に刻みこませてくれたのだと思っております。

私が体験したチリ地震津浪のことですが、私が高校二年の時でした。ちょうど一学期のテストの最中でしたので、一夜漬けの勉強のため午前二時すぎ迄おきていました。静かな静かな朝方に、ノソツ、という無気味な音を聞いたのです。それは音というより、詳しくいえば「感じ」だったと思います。その時間に起きていた私だけが感じた体験だと思っております。異変がおこる前ぶれの何かだったんではないかと思えます。

高台に逃げ、ゴーゴーと地の底をえぐるような無気味な音を聞き、一瞬にして畑や木、道路、家々が浪に吞まれていく様子を見た時はこれが地獄そのものだと思いました。

「津浪は必ずくる」ということを肝に命じ、後世に語り伝えていくべきと思います。海岸近くの低地に居住する人たち、又漁業関係に従事する人の多い高浜地区は、被害を最小限度におさえるようにしたいものです。最後にもう一度言います。『津浪は必ず来る』と。

⑮ 当時の子供達の作品より

津波のこと

斉藤優美子(旧姓岩田)

私の住んでいる高浜にはか、海岸ぞいにりっぱな堤防が建てられて

います。この堤防は、長さ約六、五〇〇メートル、高さ六メートルというりっぱなものです。その一部は、国道四十五号線にもなっており、幅広い舗装された道を、何台もの自動車がすべるように走っていきます。この堤防を見ていると、あのおそろしい思いが出されてきます。

チリ地震津波……それは、私をはじめで出会った災難でありました。それだけその恐ろしさが、今でもはつきりとよみがえってくるのです。忘れもしない、昭和三十五年五月二十四日午前二時五十分のことでした。

その夜、学校の教師をしている父は、宿直で留守でした。母と妹と私の三人は、いつもより早めに床につき、いつしかねむりに入っていました。……と、やがて、ドンドンと戸をたたく音、外のさわがしいざわめきが、夢のように感じられました。そして、とつぜん「津波だ。」という母のこうふんした大きい声がすぐ側でひびき、私と妹はびっくりしてとびおきました。

わけもわからぬまま、あわてて妹といっしょに外に出ると、すでに、すぐ前の庭まで、波がひたひたと押しよせてきていました。私は、まだ津波がきたということが信じられませんでした。私と妹はその時知らせにきたみのおばさんに手をとられ、近くの高台にあるおばさんの家に避難しました。母はやはり、かけつけてきたおじさんたちに手伝ってもらって、家具などを運び出すため、家に残りました。

おばさんの家に避難したものの、まもなく、大波がくるという知らせがあり、おばさんのうちでは波がくる心配があるので、私と妹は、みのおおばさんに連れられて、すぐうしろの小高い山に避難しました。そこには、母の実家のおじいさんや、おばあさんたちが、たんぜん姿で立っていました。そして、そのほかにも、小学校の校長先生一家や、近所の人たちが、避難していました。みんな、寒さとおそろしさで、わなわなふるえています。みんなは、ぼうぜんとして、眼下の自分の家のように、近所の家のようにすなどを見守っていました。空はふしぎに薄明るく、その下に、道に、畑に、家におし寄せて来る波が見

えました。しかし、それは、大きなうねりではありません。潮が満ちてくる時のように、静かに、確実に、それは、水かさを増し、どんどんおし寄せてくるのでした。風が気味悪いほど激しく吹き、ほおに冷たく感じられました。

私は、下の様子をながめながらも、母のことが気がかりでたまりませんでした。心細くてしかたがなかったのです。いつのまにか、妹の手をかたく、にぎっていました。やっと母がもどってきました。私は、ほっとしましたが、その顔は、気持ちの悪いほど、青ざめておりました。母は、ハアハアと、せわしそうに肩で息をつきながら下のようすをおばさんたちに教えていました。いよいよ、大きな波が襲ってくるとうのです。

みんな、緊張したおももちで、下のようすを見ました。水面よりぐんと高くもり上がった波が近づいてくるのが見えました。波は、近づくとつれて、ぐんぐんふくれあがり、どんどん押し寄せてきました。それは一つの大きな怪物のように、あたりの道を、畑を、人家をのみながら、だんだんこっちへせまってきます。夜明けの冷たい空気の中で、波のものすごいザーという音だけが、あたりに轟きました。私の家の水につかりました。あつという間に屋根だけしか見えなくなりました。

私は、いつ流されてしまうかと思つて不安でなりません。続いて、おばさんの家も水につかりました。メキメキ、バリツというすさまじい音がして、一軒の家が、とつぜん、浮き上がり、傾き、そのままどんどん流されていきます。続いてまた別の家が……。そのたびに、まわりから「ああっ」という悲痛な声がもれました。私たちは、とても信じられないような気持ちでそのおそろしい光景をじっと見ていました。それは、まさに地獄のような光景でした。

家は、次々にこわれ、浮き上がり、どんどん沖へ流されていきます。材木など浮かんで、うずをまいているおそろしい波が、押しよせてくるのです。私が来年の春、入学する小学校も、二階だけがちよっぴり見えたただけになり、すっぱりと水の中につかりました。そして、つい

昨日までのって遊んでいたブランコも、すべり台もドンドン流されていきます。

悲痛な声やがて、すすり泣きに変わりました。そして、すべての希望を失ったかのように、その場で泣きくずれていました。今まで、みんなが苦勞を重ねて築きあげてきた財産がこのいっしゅんに、水のあわのように消えてしまったのです。どんなにくやしかったでしょう。残念だったでしょう。それ以上に、おそろしさのあまり、何も考えることができず、ただただ泣きたい、泣かずにはおれない気持ちだったかもしれません。

このチリ地震津波は、各地に大きな被害をもたらしました。その被害は、次のように、おどろくべきものでした。

死者	一
家屋全壊戸数	二二二
流失戸数	七七
半壊戸数	六六
罹災世帯数	七二九
被害総額	一〇億円

(宮古市役所発表による)

この恐怖の一夜が明けると同時に、うそのように波もおだやかになり、昨夜のことが、悪夢を見ていたのではないかと思われました。夢ならさめてくれ。昨夜のことが夢だったら、どんなに神に感謝したことでしよう。

しかし、やはりそれは、たしかにあったことでした。ぬぐおうとしても、ぬぐい去ることのできない、みじめな現実でした。波は静まっても、昨日までのあのおだやかな遠浅の美しい海は、にごったどす黒い海と化していました。また、部落のようすも、昨日とはうって変わって荒れはてていました。道路はめちゃくちゃに破壊され家の破片である板や柱が山のように積み重なっており、畑は、ドロとゴミの山になり、今まで、建ちならんでいた家は、流されてあとかたもなくなったり、屋根と柱だけになったり、押しつぶされて板や柱だけになり、

見ただけで、なさけない気持ちになりました。たたみや床の上には、ドロが三十センチもたまっており、まったくくんざりする思いでした。小学校の校舎は、ドロだらけになって少し傾き、窓という窓、ドアというドアはなくなり、机や椅子が散らばりほうだい散らばって、まるでお化け屋敷のようなありさまです。こんな死んだようになってしまった部落を見て、初めて、実感として、津波がきたことを感じました。津波の恐ろしさを感じました。

それから部落の人々は、あとしまつに、家の再建に立ち上がりまして。あまりのむごたらしさに、ぼうぜんと見とれていた人々は、やっと生きる気力を持って立ち上がったのでした。市内のほうぼうからも、男の人や、おかあさん方、高等学校や中学校の生徒の方々が、作業にかけつけて来てくれました。明るい五月の太陽の下で、家についたドロを洗いおとしたり、材木などをかたづけたり……。ふだんの静かな部落とはちがった。活気にあふれた部落に一変しました。部落の人たちはこの多くの人々の勤勞奉仕に心から感謝しておりました。この人々の誠意、善意から、部落の人々は、立ち上がる気力を得ることができたのでしよう。

また宮古の人々だけでなく、全国の見ず知らずのたくさんの方々からも、暖かい善意の手がさしのべられました。救援物や見舞金などが、送られてきました。それは、部落の人々にとつて、精神的にも、物質的にも、どれほど力強い支えとなったかわかりません。うちの父や母も、ありがたいものだといくり返し言っておりました。

このような、たくさんの人々がかけて下さった大がかりな作業が、一週間ほども続きました。それでも、住むことができるように、かたづくまでには、そうとの日数がかかりました。私の家族は、母の実家のおじいさんたちといっしょに、あまり被害のなかったおぼのうちに、お世話になりました。不自由でも、にぎやかな生活でした。やっと、もとの自分たちの家にもどることができたのは津波の日から一カ月後のことでした。

現在、私の家は、海からずっと離れた高台の上にあります。もとの

場所は、同じようなひどい目に会うおそれがあるので、家を移したわけです。前の場所と比べると、急な山道をのぼらなければならなくなったり、バスの停留所まで遠くになったりして、不便な点もありますが再び恐ろしいめに会うよりはましです。それに、今年の春、増築したので、前の家より、ぐっと大きくなったし、明るくなりました。私の部屋は、二階なので、晴れた日には、東向きの窓から高浜の部落全体が、静かな湾内の海と、美しい月山を背景に見渡すことができます。ほんとうに一枚の絵のようです。

高浜小学校も、もとの場所から、金浜部落に近い、高台に建ちました。木造だった前の学校とは、めんぼくを一新して、鉄筋コンクリート二階建ての堂々たるものです。屋上に上がれば、そのながめはすばらしいものです。校庭も前の学校の時よりぐんと広くなりました。

前の学校が建っていたところは、日産農林というベニヤ工場ができて、そこに働く人たちが、高浜に住むようになりました。海の近くにあった家々も、次々に、山手の高台に場所を移しています。新しく建てたり、改築したりで、高浜全体の家々が、前より明るく近代的になりました。

このように部落は、その様子を変えていきましたが、津波から二年後の昭和三十七年に、海岸線にそって、高さ六メートルもある、りっぱな堤防が完成しました。宮古湾内を包むよう道路にそって続いている堂々たるものです。さらに国道四十五号線の舗装工事が始まり、急だった坂道はけずりとられてゆるやかな勾配になり、狭かった道は、ダイナマイトで広げられ、まったく見ちがえるようなハイウェイになりました。ただ、海だけは、いぜんと変わることもなくノリシバが立ち、カキダナが浮かび、小船が行ったり来たりしています。

あのチリ地震津波の恐怖が、うそとしか思えないようなきょうこのごろなのです。

(昭和四十二年読売つづり方コンクール県一位)